

(5)サンディエゴ計画

サンディエゴ計画

1915年1月の半ば過ぎ、モンテレーの刑務所から釈放されバシリオ・ラモス・ジュニアは国境の町マタモロスに向かった。彼が逮捕されたのはウエルタ支持者であったためとされているが、別な理由があったかどうかはわかっていない。刑務所の中には他に八人の仲間がいた。この男たちは1月6日、獄中「サンディエゴ計画」と呼ばれるマニフェストに署名していた。この十五項目からなる計画書の著者は不明のままである。外で書かれたものを刑務所に持ち込んで署名したとされている。ラモスはこの計画を実行するにあたり、同士を募る役目を持ってマタモロスとブラウンズヴィルに架かるインターナショナル・ブリッジを渡ってマッカレンへ向かった。

1月24日、ラモスはヒダルゴ郡マッカレンのアンドレ・ピヤリアルを訪ねた。ピヤリアルはリオグランデ下流地区で、ピヤ派のリーダー格として知られている医者であった。相手が悪かった。ピヤリアルはラモスの話を聞いてから、再会を約束してラモスを帰すと、同じピヤ派の仲間、開墾請負業で財を成したデオドロ・グエラの処へ行き、ラモスの企みを伝えて彼の逮捕を依頼した。

グエラはラモスを呼び寄せると、待機させていた保安官代理トム・メイフィールドにラモスを逮捕させた。ラモスをヒダルゴ郡エディンバーグの留置所に入れた後、グエラとメイフィールドはラモスの持っていた書類を読んで仰天した。メイフィールドはブラウンズヴィルにいるUSマーシャル代理T.B.ビショップ大尉を電話で呼び出し、直ちにエディンバーグに来るよう要請した。ビショップは連邦特別捜査官フランク・マックデヴィットを伴ってやってきて、書類を見るなり気絶しそうになった。その書類の中にはサンディエゴ計画書のカーボンコピーがあった。サンディエゴ計画のマニフェストとは凡そ次のようなものである。¹

1) 長い間非道な奴隷にされてきた黒人をヤンキー独裁者から開放し、アメリカ帝国主義者たちが最も不埒な手段で、メキシコ共和国から奪ったテキサス、ニューメキシコ、アリゾナ、コロラド、カリフォルニアの独立を勝ち取るため、1915年2月20日午前2時、アメリカ政府に向かって決起する。

2) この目的達成のためテキサス州サンディエゴ最高革命会議のもとに軍隊を結成し、軍隊は赤と白で「平等と独立」と書いた軍旗の下で戦う。この軍隊は「人種・人民解放軍」とする。

3) 各指揮官は攻撃目標である都市を占領したら、抗争を続けるため、武器、軍資金を調達する。指揮官は全てを上官に報告する。

4) 都市、特に州都を占領したら、革命の大儀を保ち発展させるため、地方政府責任者を任命する。

5) 特別な捕虜（民間人）であろうと兵士であろうと、捕虜とすることは厳禁する。軍資金（融資も含む）の交渉に必要最小限の時間は認めるが、交渉の成否に関わらず、如何なる理由があろうとも直ちに射殺すること。

6) 武装した外国人は武装する権利が在ることを証明出来ない場合には、即座に処刑すること。

7) 十六歳以上のアングロの男は全て殺すこと。高齢の男性、婦女子には配慮する。我民族の裏切り者へ容赦も配慮もしてはならない。

8) アリゾナのアパッチや居留地に住むインディアン（北米先住民）のために彼等の土地奪還を目指し、革命の協力を得る。

9) 部下が革命軍内の兵士、あるいは外部の共謀者に与えた役職、階級については、上司が再検討する。

10) 我々の行動が力を得、上述した州を獲得したら、独立国宣言を行い、その支配形態に関係なく、適当と思われる時期に、我等共通の母国メキシコに編入する。

11) 革命運動により黒人が独立を勝ち得た暁には、我々革命家は彼らが自ら選んだ旗を掲げることを許す。そして、我々革命家は彼らが前述した州に隣接する六つの州を創り、黒人独立国家形成を支援する。

12) 各リーダーは軍の上官と連絡を取らずに敵と妥協することを禁ず。この戦争には助命はない事を肝に銘ずべし。如何なるリーダーもラテン、黒人、日本人以外の外国人をその兵として起用してはならない。

13) 一度勝利を収めたら、この闘争に加わった者は上官に従い、この偉業を壊そうとする者には決して加担をしないことを了解する。

14) 各地区の評議会は、革命議会の常任理事を選挙する代議員を選出する。この会議において常任理事の権限と義務を決定し、革命計画の改訂を行う。

15) この行動に参画する者は次のように了解する。黒人の独立を勝ち取ることを両民族は共に高唱する。しかし、これに関しメキシコ政府からは心理的、財政的援助は受けない。また、我々の行動そのものに義務は伴わない。2

世界でも例を見ない理不尽極まる侵略戦争により国土の半分を失って以来、失地回復はメキシコ国民の妄念であり、北米原住民や虐げられたアフリカ系アメリカ人を味方にして国土回復を企てる話は、十九世紀後半、幾度かメキシコの新聞にも現れ、この時に始まったわけではない。二十世紀初頭、メキシコ革命と共に国家の誇りに目覚めた辺境の民にとって、失地回復は大きな説得力を持った。カリフォルニアからテキサスまで1910年代、スペイン語の新聞は二百三十、そのうちテキサスには十%に相当する二十三の新聞があった。その中で最も急進的なのはフロレス・マゴン兄弟のリヘネラシオンで、改革への前提

条件として国家のプライドを掲げ、テキサスにも多くの読者がいた。

1914年の暮れ、反米感情が煽られ、逆にメキシコへの愛国心が高まっていた。ラレドを中心とする国境周辺で「テキサスにいるクオウテモク、イダルゴおよびフアレスの息子たち」へ宛てたピラがまかれた。クオウテモクは悲嘆に暮れたモクテズマの代わりに立ち上がり、征服者コルテスに抵抗したアステカの英雄である。ピラはメキシコの三人の英雄の名の下に、テキサスを独立させ、更にメキシコが1857年憲法を取り戻したときに、二つの国家を合体させよう、と呼びかけた。³

その頃南テキサスのサンディエゴでも同じようなことを語り合う集団があった。サンディエゴ二千五百の人口の七十五%はメキシコ系で、皆一様にアングロに憎しみを抱いていた。1914年の夏、四人のメキシコ人がメキシコからやって来て、中央広場から通り二つ隔てたヴィクトリア通りでビールの卸と小売業を始めた。その内の一人がオクラホマ州ノーマンの高校を卒業したバシリオ・ラモス・ジュニアであった。彼は国境の町ヌエボ・ラレドの税関吏であったが、その年の春、憲政軍が侵入してきたときに逮捕され投獄された。放免されたラモスはアウグスティン・A・ガルサに伴ってサンディエゴへやってきた。ガルサは元教師で、ほっそりと色白、端正な身なりで、英語を余り喋らないながら、アメリカに住むユダヤ人のような容貌をしていた。彼はモンテレーで何らかの仕事をしてコミッションを稼いでいた。彼がサンディエゴに来たのは、そこに妹が住んでいたからとされている。

四人のうちでビールを売った経験があるのは、ヌエボ・ラレドで酒場を経営していたA・A・サエンスで、彼にとって街を占領していたウエルタ軍兵士は上客であった。サエンスはビール販売には保証金が必要であることを知っていて、当地のメキシコ系フリーメーソン協会に自分が会員であるとして協力を働きかけ、保証金を出させることに成功した。彼等は酒場を開かず卸売りのみを行い、ビールを只で振舞うか元値で売り、もっぱら反米感情のはけ口を提供していた。商売は繁盛しているかのように見えたが、利益は上がっていなかった。12月、彼等は家賃を払わずに逃げた。保証金は没収され、フリーメーソンは借金を支払う羽目になった。四人はそれぞれ別行動をしてメキシコに戻ったと思われる。その間の行動については知られていない。彼らはウエルタ派であった廉で再び逮捕されモンテレーの刑務所に集められることになった。⁴

1915年1月6日、モンテレーの刑務所でガルサ、ラモス、サエンス、そしてウエルタ派の兵士六人がサンディエゴ計画の原本に署名をした。原本を書いたのはモンテレーに住む囚人たちの「友人」で、刑務所の食事係によって密かに持ち込まれた。これ等九人のメキシコ人は計画の内容が彼等の目指すところと一致していたので署名したという。前述のとおり、計画によって示された目的はメキシコ人と日本人の自由の獲得、黒人の独立、そして先祖伝来の土地を奪われたインディアンのために土地を取り戻し、彼等の協力を得

ることであった。それまで革命中に掲げられたマデロのサン・ルイス・ポトシ、カランサのグアダルルーペ、サパタのアヤラなどの計画書と同じように、政治的指針を表明しているものの、このサンディエゴ計画は既存の革命グループの何れにも属さない、奇妙なものであった。単に民族統一を詠うのみならず、はっきりとアメリカ政府を向うに回し、特定民族の解放を掲げ、失地回復を究極の目的としていた。メキシコ国内では派閥に関係なく社会正義の確立を訴え、計画書に賛同する者は全て受け入れた。理屈ではどんなに意見を異にする敵同士であっても、崇高な目的のためには一つの旗の下に結集できるとした。1906年、PLMはヤキ・インディアンに失地回復を条件にディアスへの反乱を持ちかけた経緯がある。サンディエゴ計画はこのPLMの計画に、偶然とはいえ酷似している。⁵

暫定理事会はラモスにメキシコ北部及び米国南西部一帯で革命評議会を結成させる任務を与え、ガルサを軍事作戦の指揮官に任命した。両者は釈放されるとそれぞれが別のルートでテキサスへ向かった。ラモスはマタモロスから国境にかかる橋を渡ってブラウンズヴィルに入った。ラモスはブラウンズヴィル、コーパスクリスティの近くのサンペドロ、イーグルパス、およびサンディエゴに住む個人へ宛てた紹介状を携え、尚且つ憲政軍タマウリパス＝テキサス国境地帯防衛担当ジェネラル・エミリアノ・ナファラテが発行した通行手形を所有していた。⁶

何故ラモスがピヤリアルを訪ねようと思ったのか分からないが、結果は散々であった。ラモスが逮捕された当初、政府のどの機関が、何の罪状で逮捕するかについてかなりの混乱があった。とりあえず移民局が彼の身柄を拘束することになった。サンアントニオ連邦特別捜査局（FBIの前身）局長ロバート・バーズは一週間経過してから逮捕に踏み切った。その間にラモスが所持していた書類をもとに、他の共謀者を探し出そうと懸命の捜査が行われたが成果は上がらなかった。

移民局検査官の調書によると、ラモスは五フィート十一インチ、百四十ポンドで、すらりとした長身、かなりのインテリであったとされている。彼はメキシコ市民で1912年から税関職員であった。ラモスはビクトリアノ・ウエルタの支持者であると言明し、そのためにウエルタが国外逃亡してから二度にわたって逮捕された。最初はヌエボ・ラレドで二ヶ月に及んで留置され、彼の言によれば、国外へ行く条件で釈放され、1914年の夏ラレドへ渡った。しかしそれからの行動については、サンディエゴへ向かう前の二月間は職を探していたと言うだけではっきりした事は判明していない。彼によるとウエルタ派であることを理由に、モンテレーで逮捕され五日間留置所にいた間にサンディエゴ計画に加盟した。⁷

2月2日、AP通信社がラモスの逮捕とサンディエゴ計画を報じると、アングロ社会に不安が広がった。メキシコ革命はいよいよ最後の決戦を迎えようとしていたし、テハノとの緊張は高まっていた。アングロは終に決着を付ける日が近づいていることを感じていた。しかし決起すると記されていた2月20日午前2時になっても何事も起らなかった。南テ

キサスでは相変わらず強盗や家畜泥棒が絶えることはなかったが、メキシコ革命の混乱がアメリカにまで押し寄せてくると考える者は殆どいなかった。ラモスは逮捕された直後、ブラウズヴィルで連邦大陪審に出頭を命ぜられ、五千ドルの保釈金を言い渡され、支払能力がなく再び留置所に入れられた。彼はサンディエゴ計画の他の八名の署名者と共に5月13日に起訴された。裁判官ウォルター・T・バーンズは「牢獄より精神病院」と言って保釈金を百ドルに減額した。ラモスは保釈金を支払い、素早く橋を渡ってマタモロスに逃げ、カランサ派の高官から手厚いもてなしを受けた。⁸

決起の日とされた2月20日、ラモスが刑務所にいた間にサンディエゴ計画の改訂版が現れた。「アメリカの虐げられた人々へ」と題するこのマニフェストは2月20日、サンディエゴで署名されたとされているが、ありそうにないと否定している研究者が多い。勿論はっきりと証明されたわけではない。改訂版マニフェストは最高指揮官ジェネラル・レオン・カバヨ以下八名によって署名されている。レオン・カバヨはアグスティン・ガルサの別名だとされている。改訂版の署名者の中にはドイツ人、イタリア人など思しき名前に交じって二人の日本人らしき名前がある。それらは長崎 (Nagasaqui)、うばき (Ubaqi) で、共に偽名と思われる。改訂版はPLMの影響を受けたアメリカにおける社会革命的な要素を多分に反映させた内容になっている。⁹

1. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P81
2. Edited by Oscar J. Martinez, "U.S.-Mexico Borderland, Historical and Contemporary Perspectives", Scholarly Resources Inc., 1996, P139
3. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P79
4. Ibid. P80
5. Ibid. P82
6. Ibid. P83
7. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P216
8. Ibid. P217
9. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego 1904-1923" University of Oklahoma Press, 1992, P84